

鯨 研 通 信

第378号

1990年6月

財団法人 日本鯨類研究所 〒104 東京都中央区豊海町4番18号 東京水産ビル 電話 03 (536) 6521 (代表)



新潟県下に漂着した海産哺乳類*

池原 宏 二 (前日本海区水産研究所)**
伊藤 年 成 (新潟市立新潟水族館)
箕輪 一 博 (柏崎市立博物館)
中村 幸 弘 (上越市立水族博物館)

1. はじめに

日本海に面する府県の中で最も長い海岸線をもつ新潟県下には、海産哺乳類の漂着記録が昔から多く残されている。すなわち、1661年から1888年にかけて佐渡島に漂着した鯨類について西村(1961)¹⁾、および吉原(1976)²⁾が、1814~1989年に柏崎市海岸に漂着した海産哺乳類14例について箕輪(1988)³⁾が、江戸時代から大正時代(年代不明)に新潟県に漂着した海産哺乳類について本間・北見(1981)⁴⁾らがそれぞれ報告している。

昭和時代に新潟県下に漂着、あるいは定置網などに入網した海産哺乳類について、まとまった報告はなく、1951年以降断片的に地元新聞などに掲載されている。

筆者らは、1951年から(但し1910年と1923年***の2例を含む)現在までに新潟県下に漂着した鯨類106例(付表の不明種は鯨目とし、1例1頭で計算した)と鰐脚類15例について資料の吟味ととりまとめを行い、一部考察を試みたので報告する。

* 漂着としたが、付表の漁具欄に海産哺乳類が生きていた場合は目視、漂着、定置網、底曳網、死体で発見された場合は打ち上げ、マス流し網、刺し網と分けて記入した。図では生きていた場合に海側に、死体の場合は陸側に印をつけた。

** 現在水産庁勤務

*** 新潟市窪田町佐藤彦午氏私信

2. 資 料

1957~1988年の新潟県水産統計⁵⁾に海産哺乳類の項目があり、捕獲した月、場所、体重(1957~1968年は100kg単位、1969年以降はトン単位)は記載されているが、和名、漁獲頭数、体長、および漁業協同組合を経由しない漂着鯨や打ち上げ鯨などは記載されていない。

新潟日報は新潟県内を代表する地方新聞で、伊藤は1970年以降の鰐脚類、池原は1984年以降の鯨類の記事を整理した。

柏崎日報は柏崎市を中心としたローカル紙で、箕輪は1951年以降の記事の資料収集と追跡調査を行った。両新聞には一般に体重が記載されていなかった。

「水産にいがた」は1974年に創刊された刊行物で、引用文献の多くは水沢六郎氏(1974~1989)⁶⁾による資料である。

3. 出 現 種

1910~1989年の79年間に新潟県下で確認されたひげ鯨類は、表1のようにセミクジラ、コイワシクジラ、ナガスクジラである。セミクジラとナガスクジラは1656~1913年の京都府伊根⁷⁾や1699~1901年の山口県川尻(大村、1984)⁷⁾の主要な捕鯨対象種であった。当時はこの他にシロナガスクジラ、ザトウクジラ、コクジラ、ニタリクジラなどのひげ鯨が捕獲対象になっていたが、今回の調査ではこれらは全く確認されなかった。現在と当時では日本海に出現する鯨の種類組成が異なっている。

表1 新潟県下に漂着した海産哺乳類の種類別例数と頭数、および出現時期

亜 目	科 名	和 名	例	頭数	出 現 時 期	
ヒゲクジラ亜目	セミクジラ科	セミクジラ	1	1	6月	
		ナガスクジラ科	コイワシクジラ	7	7	4～7月、9～2月
		ナガスクジラ	1	1	3月	
ハクジラ亜目	アカボウクジラ科	メソプロドン属	10	10	2～6月、10～12月	
		ツチクジラ	4	4	2、7、12月	
		アカボウクジラ科	1	1	4月	
	ネズミイルカ科	イシイルカ	31	82	1～5月	
		ネズミイルカ	3	3	3、5月	
	マイルカ科	オキゴンドウ	2	2	6、12月	
		コビレゴンドウ	6	22	1、7、12月	
		マイルカ	4	4	2、6、7月	
		バンドウイルカ	1	1	2月	
		カマイルカ	6	6	1～4月	
		イルカ(種不明)	3	11	1、3、4月	
	アシカ亜目	アシカ科	トド	2	3	2、3月
			オットセイ	4	4	1～3、6月
アザラシ亜目	アザラシ科	ゴマフアザラシ	2	2	1、5月	
		ワモンアザラシ	3	3	1、6、12月	
		アゴヒゲアザラシ	2	2	2、10月	
		アザラシ(種不明)	2	3	1、12月	
クジラ目			26	26		
合 計			121	198		

歯鯨類はアカボウクジラ科メソプロドン属、ツチクジラ、イシイルカ、コビレゴンドウなど3科9種が確認された。石川県能都町では縄文時代から明治時代までイルカを漁獲していたことから(平口・宮崎、1986)⁸⁾、古くから歯鯨類は日本海に回遊してきたといえる。

しかし、1656～1913年の京都府伊根²⁾や山口県川尻⁷⁾では歯鯨の記録はない。これは当時、歯鯨が生息していたにもかかわらず捕獲しなかったのか、あるいは捕獲したが記録しなかったのか定かでない。

アシカ類はトドとオットセイ、アザラシ類はゴマフアザラシ、ワモンアザラシ、アゴヒゲアザラシが確認された。

このうち、メソプロドン属、ネズミイルカ、バンドウイルカ、コビレゴンドウの4種は初めて新潟県下で確認された種類である。

4. 種類別出現時期と出現場所

1) セミクジラ

1982年6月に相川町で体長7mのセミクジラの腐敗個体が1頭刺し網に羅網した* (図1)。この種の出生時体長は5～6mであることから(表2、西脇、1965)⁹⁾、この個体は子鯨といえる。

2) コイワシクジラ**

コイワシクジラの出生時の体長は2.8～3.0m、イワシクジラは4.5～4.8mである⁹⁾。しかし、新潟日報に報道されたイワシクジラの体長に3.8mと4.0mがあり、この2頭は出生時の体長より小さいことからイワシクジラではないと考えられる。この他に体長5.5m、5.6m、6.0mのイワシクジラが報道されているが、イワシクジラは日本海に入らないと大村⁷⁾が報告していることから、これらは、ここではコイワシクジラとして扱った。

* 相川町役場水産課坂下健次氏私信。

** 地方によりコイワシクジラ(ミンクジラ)を俗にイワシクジラと呼ぶことがある(大村秀雄博士)。

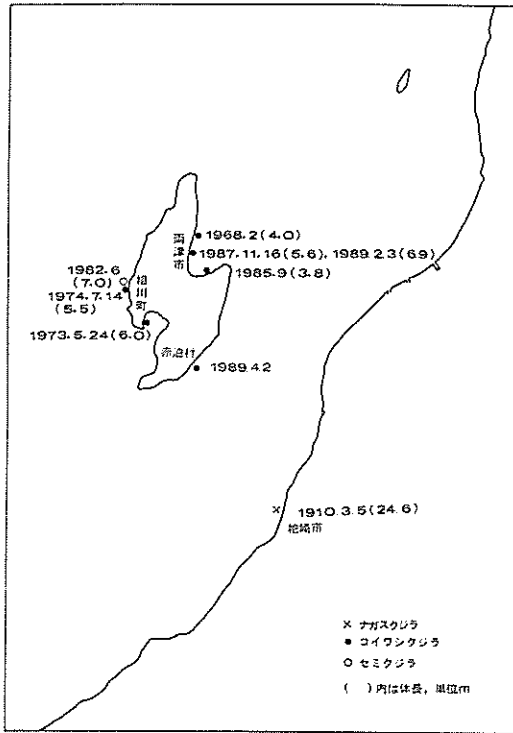


図 1 新潟県下に漂着したヒゲクジラ類

コイワシクジラは 4 月に佐渡島赤泊村地先の海上に死体が浮いていた (体長不明)。5 月と 7 月に相川町で、2 月、2 月、9 月、11 月に両津湾で、いずれも定置網に体長 3.8~6.9m の大きさが各 1 頭入網した。性成熟の体長は 7 m 前後であることから⁹⁾、いずれも未成熟個体である。

1985 年 6 月に富山湾で体長 4.8 m、体重 2.5 トンのコイワシクジラが 1 頭、他に 4~7 月に漁業者がイワシクジラと同定した体重 1.2~4.0 トンの鯨が 4 頭、10 月に 1 頭定置網に入網した (阿本、1986)¹⁰⁾。この出現時期や大きさが佐渡島のコイワシクジラと一致すること、イワシクジラが日本海に分布しないことなどから⁷⁾、富山湾で漁業者がイワシクジラと同定した鯨もコイワシクジラの未成熟個体と考えられる。

また、相川町や村上市岩船のイカ釣り漁業者は 5~6 月に佐渡島外海を航行中に鯨を見たことがあるという。この時期が相川町でコイワシクジラが捕獲された時期と一致し、場所は定置網の近くであることや、コイワシクジラの餌料がプランクトン、イワシ、イカ類であることから、イカ釣り漁業者が見た鯨もコイワシクジラと推定される。これらの結果、コイワシクジラは春から初夏に佐渡島外海や富山湾を北上し、秋から冬に両津湾や富山湾を南下回遊すると考えられる。

第 2 表 新潟県下に漂着した海産哺乳類の体長、およびその成体と出生時の体長 (単位: m)

和 名	漂着個体の大きさ	成体 (性成熟) の大きさ※	出生時の大きさ※
セミクジラ	7.0	15.0~18.0	5.0~6.0
コイワシクジラ	3.8~ 6.9	♀ 8.9、♂ 8.1 (♀ 7.3、♂ 6.8) ¹¹⁾	2.8~3.0
ナガスクジラ	24.6	♀19.5、♂19.7 (♀18.6、♂17.7) ¹¹⁾	6.3 ¹¹⁾
メソプロドン属	2.4~ 6.0	6.0	
ツチクジラ	9.0~11.0	♀12.8、♂11.8 (♀10.1、♂ 9.4) ¹²⁾	4.6~4.7
イシイルカ	1.6~ 2.3	1.7~2.2 (1.8)	0.9~1.0
ネズミイルカ	1.1~ 1.8	1.8	0.7~0.9
オキゴンドウ	3.5、5.0	♀ 5.0、♂ 5.7 (♀3.5~4.0、♂4.3) ¹¹⁾	1.75 ¹¹⁾
コビレゴンドウ	3.7~ 5.4	♀ 3.6~4.2、♂ 4.7~5.5	南方1.4、北方1.85
マイルカ	1.1、1.7、2.9	♀ 2.1、♂ 2.2 (1.75~1.8)	1.1~1.25、(0.8~0.9) ¹¹⁾
バンドウイルカ	2.9	3.0~3.7 (♀2.7、♂3.0) ¹¹⁾	1.3
カマイルカ	1.6~ 2.5	2.0~2.3 (♀1.83、♂1.84) ¹¹⁾	1.2、(0.9~1.0) ¹¹⁾
トド	1.0、2.5	♀ 2.3~3.0、♂ 3.1~4.0	1.0 (17kg) ¹¹⁾
オットセイ	1.0、1.3	♀ 1.4、♂ 2.5	0.6 (4.3kg)
ゴマフアザラシ	0.8、0.8	1.5~2.0	0.7 (8.5~11.5kg) ²⁴⁾

和 名	漂着個体の大きさ	成体 (性成熟) の大きさ	出生時の大きさ
ワモンアザラシ	0.6~1.0	♀ 1.1~1.3, ♂ 1.2~1.5	0.6 (4kg) ¹¹⁾
アゴヒゲアザラシ	0.8, 1.8	2.6~3.0	1.2~1.4 (27~35kg) ¹¹⁾

※ 主に西脇 (1965) による。

コイワシクジラには日本海-黄海-東シナ海系群があり (遠洋水産研究所, 1989)¹¹⁾、主として韓国によって利用されてきた報告があるので、今回確認された個体はこの系群で、対馬海峡から日本海に來遊したと考えられる。

3) ナガスクジラ*

1910年3月に柏崎市に全長24.6m、体重68トンのナガスクジラの成体が1頭漂着³⁾した。この鯨の墓は柏崎市宮川神社に「記念鯨頭骨」と刻まれ、ひげ板は山田一誠氏 (柏崎市栄町) が所蔵し、これに拾得時の様子、売上げ金額550円などが書かれている。

ナガスクジラは1891年まで京都府伊根²⁾、1901年まで山口県川尻⁷⁾で捕獲していたことから、当時の日本海ではさほど珍らしくなかったと考えられる。現在は東支那海系群と北太平洋系群が存在している¹¹⁾。

4) アカボウクジラ科メソプロドン属**

一部の動物図鑑にアカボウクジラ科のツチクジラは記載されているが、メソプロドン属 (オオギハクジラ属) の記載がないため、メソプロドン属の鯨をツチクジラと誤って同定され、報道される例が多い。1965年5月下旬に神林村の定置網に入網した体長4m^{***)}と、1988年10月に両津市に漂着した体長4mの個体もツチクジラと報道された。しかし、ツチクジラの出生時の大きさが4.7mであることや⁹⁾、新聞写真の口ばしの外形から判断するとメソプロドン属の鯨と同定されるのでこれを用いた。

池原も1984年5月に中条町に打ち上がった1頭のメソプロドン属の鯨を、初めはツチクジラと誤まって同定したが、この時の反省が鯨類研究のきっかけとなっ

た。

メソプロドン属の鯨は2~6月に大和堆¹²⁾****、佐渡島沖合****、両津市、小木町、相川町、村上市、神林村、中条町、10月に両津市、12月に西山町で確認され、秋から春に出現している (図2)。体長は2.4~6.0mで4~6mが多い。メソプロドン属の鯨の成体の体長は6mに達することから⁹⁾、これらは未成熟個体、および成体と推定される。

1984年5月に中条町に打ち上がった個体を筆者らが (1985)¹³⁾ 観察した結果、体の表面は黒色で白い傷が20数条ある雄で、歯の周囲にミミエボシが寄生し、胃は空っぽであった。この鯨の骨は発見者の佐藤善太郎氏 (中条町笹口浜) の好意で新潟市に寄贈され、現在は完全な形の骨格標本として新潟市立新潟水族館に展示されており、詳細について後日報告する。

日本海で発見されたオオギハクジラは1960年5月に秋田県⁹⁾、1984年6月に舞鶴湾 (Miyazaki *et al.* 1987)¹⁴⁾、メソプロドン属の鯨は1988年2月に石川県富来町 (体長4.5m)、3月に同県珠洲市長手岬沖20kmの海上 (体長4.0m)、5月に同県穴水町前浜 (北国新聞)、12月に珠洲市¹⁵⁾、1989年4月に富山県魚津市¹⁶⁾、石川県輪島市2頭¹⁷⁾がある。メソプロドン属の鯨はこれまでに極くまれにしか観察されず、種の保持がどう行われているのか全く不明であった。しかし、1988~1989年に新潟県から石川県にかけて12例12頭の報告があり、これだけ多いことから種の保持は十分考えられる。特に1989年4月に小木町で胎児が確認され注目される。

5) ツチクジラ

ツチクジラは2月と12月に中条町、7月に村上市と

* 本種は戦後東支那海で多数捕獲された。これは local stock らしく、日本海へはほとんど入らなかった。かつて捕鯨船を長門市仙崎に廻航したが、1頭の捕獲もなく失敗であった (大村秀雄博士)。

** アカボウクジラ科オオギハクジラ属の鯨は個体数は少ないと考えられているが、種の数は12種と極めて多い。種の正確な査定が必要である (大村秀雄博士)。

*** 鯨を恵比寿様と呼び、代々捕獲してはいけなさいといわれている。この時は偶然沖から岸に向う鯨を発見し、定置網に入らないよう念じていたがかき網にかかった (神林村渡辺俊三氏私信)。

**** この2頭はオオギハクジラであるが、ここではメソプロドン属として取り扱った。また、骨格標本を作るため新潟市万代島、前日本海区水産研究所隣の信濃川川岸に埋めたが、1964年6月の新潟地震で流失した (西村三郎博士私信)。

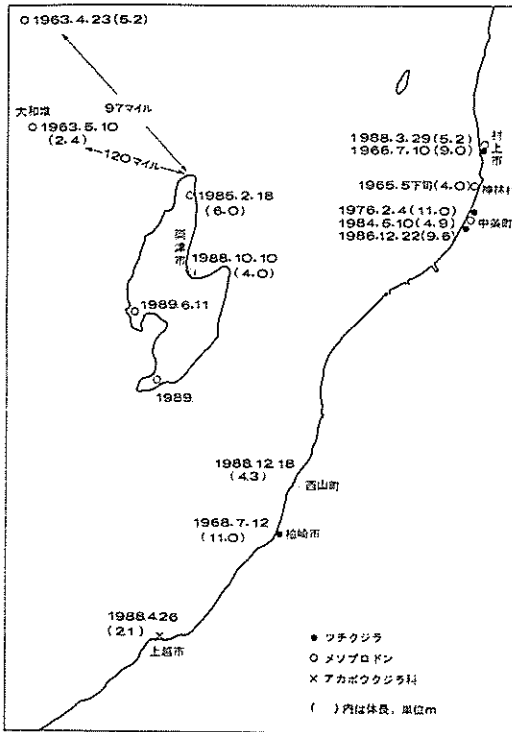


図 2 新潟県下に漂着したハクジラ
(アカボウクジラ科)

柏崎市で各 1 頭が打ち上がった。体長は 9~11m、体重 5~10 トンあり*、今回観察された海産哺乳類の中でナガスクジラについて大きい。この種の性成熟は雄は 9.4m、雌は 10.1m であることから (大隅、1986)¹⁹⁾、打ち上がった個体のうち 3 頭は成体、未成熟個体は 1 頭であったと推定される。現在日本海系群が考えられており¹¹⁾、成体が 3 頭も確認されていることから、資料はこれに属するものと考えられる。この他に房州-北海道系群があり¹¹⁾、房総半島から網走沖海域で捕鯨が行われている (大隅、1988)¹⁹⁾。

一般にツチクジラは 10~30 頭で集団行動し⁹⁾、単独で遊泳することは珍しいといわれているが、日本海で打ち上がった個体はいずれも単独であった。この要因は不明である。

6) アカボウクジラ科不明種

1988年 4月に上越市で体長 2.13m、体重 86kg のアカ

* 1957年 12月と 1964年 2月に両津湾の定置網に入網した体重 7.500kg と 7.800kg の不明種は、体重や打ち上げ時期から推定するとツチクジラでないかと考えられるが、不明種としてとり扱った。

ボウクジラ科不明種が生体で漂着した。日本近海に分布するアカボウクジラ科の中で 2m 前後で出産する種類はアカボウクジラとメソプロドン属の鯨である。メソプロドン属の鯨は 1988~1989 年に 12 例 12 頭、しかも 1989 年に胎児をもつ成体が確認されている。一方、アカボウクジラは新潟県下では未確認であるので、本例はメソプロドン属の鯨の可能性が高い。また、体長と体重が小さいことから、日本海で出産したと推定される。

7) イシイルカ**

11~5 月に日本海沖合のマス流し網、底曳網、刺し網で漁獲され、新潟市魚市場に水揚げされた海産哺乳類⁵⁾を漁業者に聞いたところ、冬にとれるイルカだろうという。

また、1959~1982 年の 3~5 月に村上市岩船の小型底曳網で漁獲した海産哺乳類⁵⁾は、腹が白く、音を出すイルカで、以前に若い乗組員が小使い銭かせぎに漁船についてくるイルカをヤスでついたことがあるという。

イシイルカの体重は 100kg 以上になるが⁹⁾、ネズミイルカの体重は 45~54kg であるので、新潟県水産統計⁵⁾の対象種としては前者の可能性が高い。また、イシイルカは自ら進んで航行中の船に近づき、音を出す習性があり (ガスキン、1986)²⁰⁾、冬に日本海で越冬し、3 月に山口県沖に、その後北上し、6 月に男鹿半島沖合に移動する (宮下、1988)²¹⁾。イシイルカの体重、来遊時期、習性が新潟市、および村上市岩船に水揚げされたイルカのそれらと一致することから、これらはイシイルカとして扱った。

イシイルカには腹部の白い部分が背鰭下から肛門までのイシイルカ型と、胸鰭から肛門までのリクゼンイルカ型がある。1~3 月に新潟市~上越市で 7 頭が打ち上がり、1 月に両津市、3 月に能生町、4 月に上越市で各 1 頭が漂着した (図 3)。これらはいずれもイシイルカ型である。また、3~6 月に村上市沖の海上と日本海沖で 21 例 72 頭 (1 頭 100kg と計算) が捕獲された。日本海沖合のイシイルカはイシイルカ型であるので²¹⁾、これらもイシイルカ型と考えられる。

1~3 月に打ち上がったり、漂着した個体は越冬中、3~6 月に海上で捕獲された個体は越冬しない、北上途中にある個体と考えられる。

特に 1989 年 1 月に新潟市五十嵐に打ち上がったイシ

** 両津市の漁業者はイルカ類をセンズ、又はカチモン (邪魔をする) と呼び嫌っている (両津市内海府漁業協同組合加賀昭市氏私信)。

コビレゴンドウは12月から1月に両津湾の定置網や刺し網で5例17頭が捕獲された(図4)。特に1967年1月11日に両津湾の定置網に一度に13頭も入網し、最

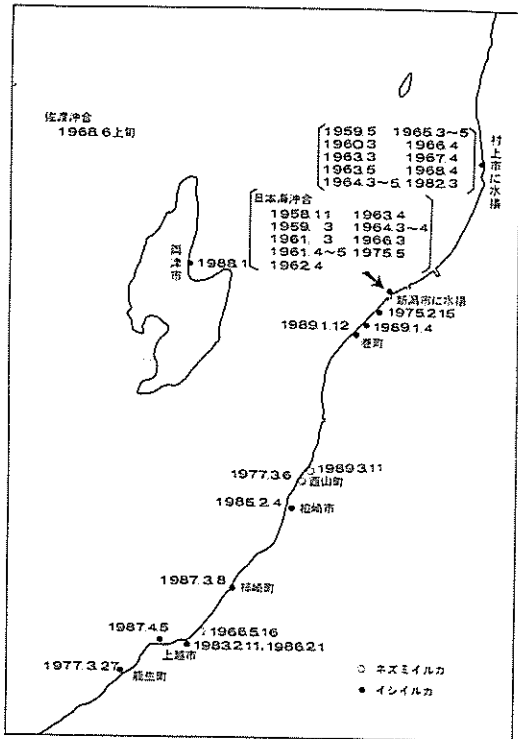


図3 新潟県下に漂着したハクジラ (ネズミイルカ科)

イルカ型の個体の体測にモリでついたような傷があった。イシイルカは冬に主に三陸～北海道道東周辺で突きん棒漁業で捕獲している(21)、傷のある個体はこの時にとりそねたものと推定され、津軽海峡を経由して新潟市海岸にたどりついたと考えられる。宮下(21)は、日本海で越冬したイシイルカは春から夏に、その一部分が津軽海峡を通過して太平洋側に回遊し、大部分は宗谷海峡をぬけてオホーツク海で夏を過すと報告している。傷のある個体は前者を裏付けるものと考えられる。

本種の成体は1.7～2.2mであり(9)、新潟県下で観察された10頭の体長は1.6～2.3mであるので、大部分が成体と推定される(72頭の体長は不明)。

8) ネズミイルカ

ネズミイルカは3月に西山村で体長1.4m～1.8m、5月に上越市で体長1.06mの個体が打ち上がった。本種の成体は1.8mになるので(9)、2頭は未成年、1頭は成体である。

生息限界水温は7～12℃(11)と低いことから、冬～早春に出現する種類といえる。

9) コビレゴンドウ

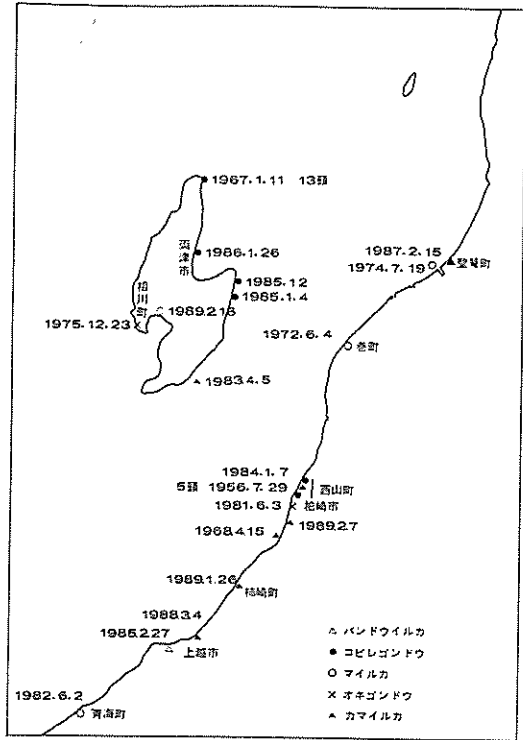


図4 新潟県下に漂着したハクジラ (マイルカ科)

大の個体は体長3m以上、体重4トンで、この体内に体長1m、体重20kgの胎児が入っていた。コビレゴンドウの出生時の体長は約1.4mであるので(9)、この胎児は胎生後半期の個体と推定され、日本海での出産の可能性が示唆される。この他に西山村海岸に1956年7月に一度に5頭が打ち上がったが、これには胎児はいなかった(柏崎市魚市場箕輪忠敬氏私信)。

コビレゴンドウには8～24℃に生息する三陸、北海道系群のタツバナガ(地方名)(11)と、20～30℃に生息する伊豆一沖繩系群のマゴンドウ(地方名)がある。12～1月の両津湾における28年間の平均表面水温は12.2～15.5℃(長沼・市橋、1985)(22)、7月の西山村のそれは21.6℃であるので、冬の出現種はタツバナガ、7月はマゴンドウと推定される。

10) マイルカ

マイルカは2月に佐和田町で体長2.9m、6月に巻町で体長1.1m、青海町で体長1.7m、7月に新潟東港で体長2mの個体が観察され、3頭が初夏に出現している。

マイルカの出生時の体重は $0.8\sim 0.9\text{m}^{11}$ 、あるいは $1.1\sim 1.25\text{m}^{9)}$ であるので、巻町に打ち上がった 1.1m の個体は出生後まもない個体である。成熟体長は $1.75\sim 1.8\text{m}$ であるので、3 頭は成体と考えられる。

5～7 月に能登半島や佐渡海峡を日本海区水産研究所みずほ丸で北上航行すると、船に伴走する数頭のマイルカによく出会うことがある。これからみると、資料の成体マイルカは北上途中にあったと考えられる。

11) オキゴンドウ

オキゴンドウは 6 月に柏崎市で体長 5.0m 、12 月に相川町で体長 3.5m の個体が各 1 頭打ち上がった。本種の生息適水温は $22\sim 26^\circ\text{C}^{11)}$ 、限界水温は $17\sim 32^\circ\text{C}$ である。しかし、12 月の相川町沿岸の平均表面水温が 14.7°C で²²⁾、本種の適水温より $7\sim 11^\circ\text{C}$ も低い。この低水温のためにへい死したと考えられる。

成熟時の大きさは雌は $3.5\sim 4.0\text{m}$ 、雄は 4.3m であるので¹¹⁾、柏崎市の個体は成体である。

12) バンドウイルカ

バンドウイルカは 1985 年 2 月に上越市で体長 2.85m の個体が 1 頭打ち上がったにすぎない。本種の生息適水温は $20\sim 25^\circ\text{C}^{11)}$ 、限界水温が $15\sim 30^\circ\text{C}$ である。2 月の上越市沿岸の平均表面水温は 10.8°C であり²²⁾、適水温より $9\sim 14^\circ\text{C}$ も低下しているので、打ち上がった個体は秋から冬に対馬海峡以南に南下できず、越冬中にへい死したと考えられる。

13) カマイルカ

カマイルカは 1～3 月に聖籠町から上越市にかけて体長 $1.6\sim 1.75\text{m}$ が 4 例 4 頭打ち上がり、4 月に柏崎市で体長 2.5m 、羽茂町で 1.85m の個体が刺し網に羅網した。いずれも冬の低水温期に出現している。本種の生息適水温は $10\sim 15^\circ\text{C}^{11)}$ 、限界水温が $7\sim 23^\circ\text{C}$ であるので、1～3 月の 4 頭は越冬中に、4 月の 2 頭は運悪く刺し網に羅網したためへい死したと考えられる。

雌が 50% 性成熟する体長は 1.83m であるので¹¹⁾、1～3 月に打ち上げられた $1.6\sim 1.75\text{m}$ の 4 頭、および刺し網の 1.85m の個体は性成熟前後の個体、体長 2.5m の個体は成体である。

14) トド

トドは 1977 年 3 月に相川町、1985 年 2 月 26 日に両津市藻浦で体長 1m 、翌日に同場所で 2.5m の個体が観察された (図 5)。雌は $2.3\sim 3\text{m}$ になり⁹⁾、子は 1.0m 前後¹¹⁾ であることや、授乳は 8～11 カ月、時に 24 カ月に及ぶ場合があることから (ボナー、1986)²³⁾、両津市で観察された 2 頭は親子の可能性が考えられる。

また、新潟日報によると同一場所で大正初期にも観

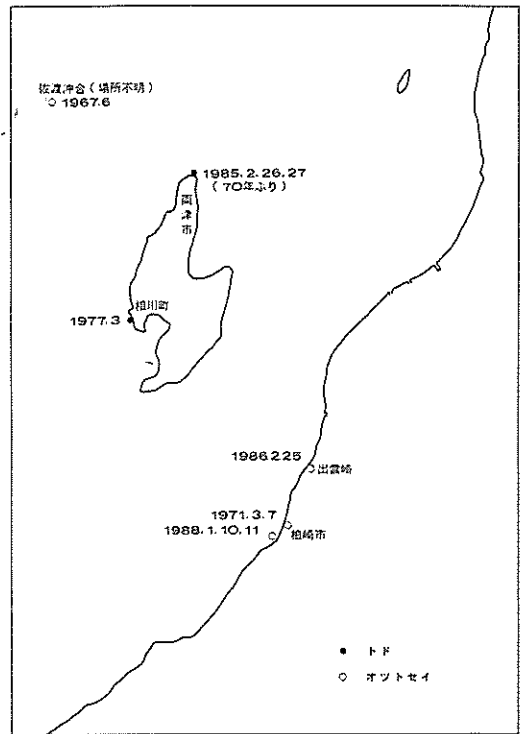


図 5 新潟県下に漂着したアシカ類

察されている。いずれも佐渡島で観察されており、佐渡島にはトド岩があることから、古くからまれに來遊してくるようである。

トドは北海道奥尻島や利尻島に一時的に來遊してくることから⁹⁾、この一部が南下したと考えられる。

15) オットセイ

オットセイは 1～3 月に出雲崎町から柏崎市で体長 $1.0\sim 1.3\text{m}$ の個体が 3 頭、6 月に佐渡島沖合の海上で 1 頭が観察された。

本種は冷水性の動物で、繁殖地のちがいにより 5 つの系群があり¹¹⁾、いずれもベーリング海、オホーツク海、日本海などに分布するので、観察された個体の系群は明らかでない。しかし、冬に発見された個体は越冬中、6 月の個体は北上途中にあったと考えられる。

16) ゴマフアザラシ

ゴマフアザラシは 1986 年 1 月に両津市、1988 年 5 月に山北町で、いずれも体長 0.8m 、体重 8kg の大きさが目視された (図 6)。本種の出生時期が 2～4 月で¹¹⁾、体長は $0.7\sim 0.8\text{m}$ 、体重 $8.5\sim 11.5\text{kg}$ であることから (増井 1980)²⁴⁾、いずれも出生後まもない幼獣と考えられる。しかし、成体は観察されなかった。

10kgも小さい幼獣である。成熟体長は雄が2.9m、体重400kg、雌が2.6mになるので⁹⁾、新潟東港の個体は未成年である。

本種はオホーツク海、ベーリング海に分布することから¹¹⁾、宗谷海峡から日本海に入り、10月の新潟東港の個体は南下途中にあると考えられる。

5. ま と め

1951～1989年に最も多く観察された海産哺乳類はイシイルカで、冬を中心に31例82頭確認された。マイルカの観察例は4例4頭と少ないが、池原が毎年佐渡海峡の海上で数頭の群を観察している。コイワシクジラは佐渡島と富山湾から13例13頭、また佐渡島外海では漁業者が毎年のように観察している。すなわち、この3種は量的に少ないが毎年日本海に來遊してくると考えられる。

メソプロドン属の鯨は1988～1989年に新潟県から石川県にかけて12例12頭と多く観察された。人目につくのが極くまれなメソプロドン属の鯨が、2年間に12頭も確認され、この中に胎児がいる成体が含まれていることや、この他に出生直後のメソプロドン属ではないかと推定される個体が確認されたことから、メソプロドン属の鯨は日本海を生息の場としていることを示唆しており、最近増加しつつある種類と考えられる。

コビレゴンドウは6例22頭確認され、2番目に多い種類である。特に両津湾では一度に13頭、西山町では5頭観察された。今回確認された海産哺乳類の中で群をなしていたのは本種とマイルカ、親子で観察されたのはトド、他の種類はいずれも単独で観察された。

他の種類は38年間に6例6頭以下と少なく、新潟県下に極くまれに來遊したといえる。

季節別にみると春から夏にコイワシクジラ、マゴンドウ、マイルカ、秋から春にメソプロドン属の鯨、冬にイシイルカ、カマイルカ、タッパナガ、周年観察されたのはツチクジラであった。鰐脚類はいずれも冬にみられたが、ゴマフアザラシとワモンアザラシは春にも各1頭が観察された。

次に、日本海への來遊経路をそれぞれの種の分布海域、生息水温、系群などから大胆に推定すると、宗谷海峡から來遊してきたと考えられる種類は、冬を中心に出現するイシイルカ、およびアザラシ科のワモンアザラシ、ゴマフアザラシ、アゴヒゲアザラシである(図7)。津軽海峡を経由して來遊したのはイシイルカの一部とタッパナガ、両海域のいずれか、あるいは両者が不明なのがネズミイルカ、カマイルカ、オットセイ、トドである。対馬海峡から來遊したのは初夏や

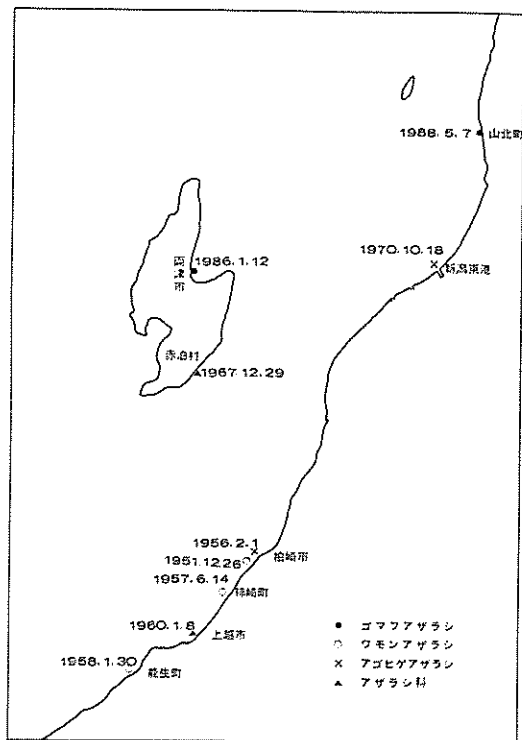


図6 新潟県下に漂着したアザラシ類

本種の分布はアリューシャン海域から日本海、東支那海北部にかけての広い海域である¹¹⁾。しかし、三陸～北海道東海域には分布しないことから、日本海へ來遊した個体は宗谷海峡を経由してきたと考えられる。

17) ワモンアザラシ

ワモンアザラシは1月に能生町で体長0.6m、体重11kgの個体が漂着した(西村²⁹⁾はファイリアザラシとしているが、西脇⁹⁾によるとワモンアザラシの異名となっている)。また、6月に柿崎町で体長0.67m、12月に柏崎市で体長1.0mの個体が漂着した。出生児の体長は60cm、体重4kg¹¹⁾、成体は1.35m、体重90kgになることから、60～67cmの個体は幼獣と考えられる。

日本周辺にはオホーツク海系群が生息しているので¹¹⁾、宗谷海峡から日本海へ來遊したと考えられる。

18) アゴヒゲアザラシ

アゴヒゲアザラシは2月に柏崎市で体長0.8m、体重19kg、10月に新潟東港で体長1.8m、体重120kgの個体が漂着した。出生児の体長は1.2～1.4m、体重27～35kg¹¹⁾であるが、柏崎市の個体はこれより約50cm、

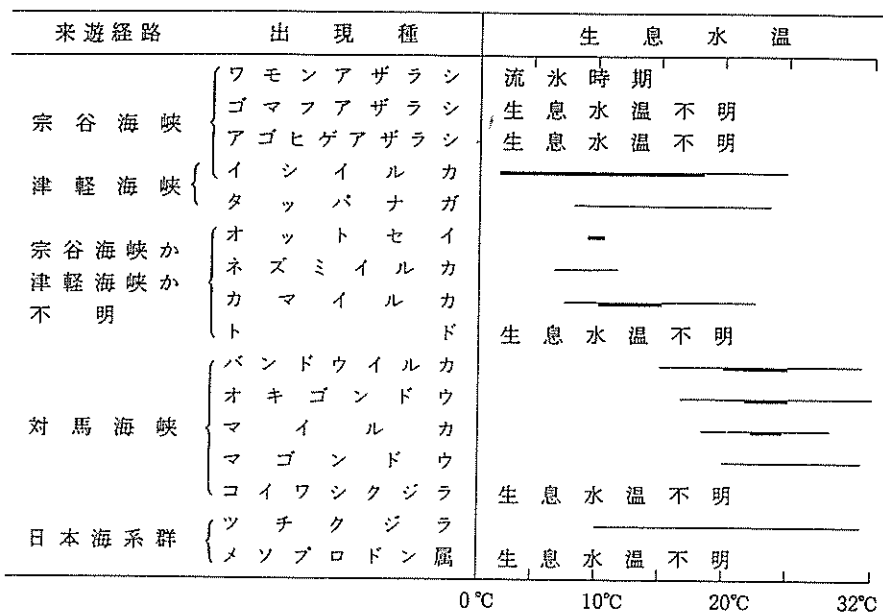


図7 新潟県下に出現した海産哺乳類の来遊経路と生息水温（太線は適水温）

秋から冬にみられたコイワシクジラ、マイルカ、バンドウイルカ、オキゴンドウ、マゴンドウ、周年日本海に生息するのはツチクジラとメソプロドン属の鯨と考えられる。

次に、鯨類の発育段階を大きさから胎児、幼体、未成年体、成体の4段階に分けると、胎児がみられたのはメソプロドン属の鯨とタッパナガ、幼体はセミクジラ、マイルカ、アカボウクジラ科である（表3）。これらのうち成体が観察されているのはメソプロドン属の鯨、タッパナガ、マイルカで、この3種は日本海で出産する可能性が考えられる。しかし、マイルカの生息適水温が22~25℃¹¹⁾、限界水温が19~28℃であるので、本種は日本海で越冬できず、出産は成体が日本海に來遊して行くものと推定される。

未成年体はコイワシクジラ、メソプロドン属の鯨など7種、成体はツチクジラ、イシイルカなど10種が確認された。これらのうち、コイワシクジラ、イシイルカ、ネズミイルカ、カマイルカ、ナガスクジラ、コビレゴンドウ、オキゴンドウ、マゴンドウの8種はそれぞれの分布海域、生息水温、観察頭数、出現時期、系群などから周年日本海に生息すると考えられず、それぞれの発育段階になって日本海に來遊したと考えられる。

鰭脚類はアザラシ類が幼体、アシカ類とアゴヒゲアザラシ、ワモンアザラシが未成年体、成体はトドの1頭が観察された。

今後は日本海各地で正確な資料を集取、蓄積し、日

表3 新潟県に漂着した海産哺乳類の発育段階別頭数

発育段階	鯨類 (頭)	鰭脚類 (頭)
胎児	メソプロドン属	1
	タッパナガ	1
幼体	セミクジラ	1
	マイルカ	1
	アカボウクジラ科	1
未成年体	コイワシクジラ	7
	メソプロドン属	8
	ツチクジラ	1
	イシイルカ	1
	ネズミイルカ	2
	カマイルカ	5
	オキゴンドウ	1
成体	ナガスクジラ	1
	メソプロドン属	2
	ツチクジラ	3
	イシイルカ	9
	ネズミイルカ	1
	コビレゴンドウ	8
	オキゴンドウ	1
	バンドウイルカ	1
	マイルカ	3
	カマイルカ	1

本海における海産哺乳類の生態を明らかにしていく努力が必要である。

終りに、資料を快く提供して下さった京都大学教授西村三郎博士、新潟県水産課専門技術員野田栄吉氏、上越市立水族博物館長萩原浩一郎氏、中条町漁業佐藤善太郎氏をはじめ多くの新潟県内の漁業関係者、本文の投稿をすすめご校閲を賜った筑波大学医療技術短期大学教授神谷敏郎博士、ご校閲を賜った遠洋水産研究所長大隅清治博士、日本海区水産研究所長藤井豊博士、日本鯨類研究所顧問大村秀雄博士、作図された日本海区水産研究所臨時職員勝見頼子さんに心からお礼を申し上げます。

(付記 本誌によると、メソプロドン属の鯨は1989年8月に富山県、11月に秋田県でも確認されている。)

参考文献

- 西村三郎 (1961) “佐渡年代記”にあらわれた流れ鯨の記録 (1). 採集と飼育 23 (12): 371—373.
- 吉原友吉 (1976) 丹後国伊根浦の捕鯨. 東京水産大学論集. (11): 145—184.
- 箕輪一博 (1988) 柏崎海岸で採捕された珍稀生物. 柏崎市立博物館館報 (3): 63—85.
- 本間義治・北見健彦 (1981) 新潟・佐渡近海における海産哺乳類の分布と往時の記録. Bulletin of the Biogeographical Society of Japan 36 (11): 93—101.
- 5—1. 農林省新潟統計調査事務所 (1957～1969) 新潟県水産統計.
- 5—2. 北陸農政局新潟統計調査事務所 (1970～1971) 新潟県水産統計.
- 5—3. 北陸農政局新潟統計情報事務所 (1972～1974) 新潟県水産統計.
- 5—4. 北陸農政局新潟統計情報事務所 (1975～1986) 新潟農林水産統計年報.
- 5—5. 北陸農政局新潟統計情報事務所 (1987～1988) 新潟県漁業の動き.
- 水沢六郎 (1974～1989) 水産にいがた. 新潟県漁業協同組合連合会.
- 大村秀雄 (1984) 日本海の鯨. 鯨研通信 (354): 65—73.
- 平口哲夫・宮崎信之 (1986) 動物遺体. 真胎遺跡. 能都町教育委員会・真胎遺跡発掘調査団: 346—400.
- 西脇昌治 (1965) 鯨類・鱧脚類. 東京大学出版会: 1—439.
- 岡本勇次 (1986) 富山湾でクジラの捕獲が相次ぐ. 水産海洋研究会報 50 (2): 190—191.
- 遠洋水産研究所 (1989) 我が国漁獲対象魚種の資源特性 (III). 水産庁研究部: 334—453.
- Saburo Nishimura and Masaharu Nishiwaki (1964) Records of the beaked whale *Mesoplodon* from the Japan Sea. Publications of the Seto marine biological laboratory 12 (4): 51—66.
- 池原宏二・清水栄一・松山義明・伊藤年成・小川忠雄・神谷敏郎 (1985) 新潟海岸に打上げられた歯鯨メソプロドンについて. 昭和60年度日本水産学会春季大会講演要旨集: 98.
- Nobuyuki Miyazaki, Izumi Nakamura, Shinsuke Tanabe and Ryo Tatsukawa (1987) A stranding of *Mesoplodon Stejnegeri* in the Maizuru bay, Sea of Japan. The scientific reports of the whales research institute (38): 91—105.
- 斉藤 豊 (1989) メソプロドン属幼体の漂着. 能登の海からのたより (19). のとじま臨海公園水族館: 6.
- 浜岸豊治 (1989) ストランディング・レコード 13. 鯨研通信 (376): 9.
- 樋田俊郎 (1989) ストランディング・レコード 13. 鯨研通信 (376): 9.
- 大隅清治 (1986) アカボウクジラ科18種. 動物大百科 2 海生哺乳類. 平凡社: 60—61.
- 大隅清治 (1988) クジラは昔陸を歩いていた. P H P 研究所: 1—252.
- D. E. ガスキン (1986) ネズミイルカ類. 動物大百科 2 海生哺乳類. 平凡社: 44—47.
- 宮下富夫 (1988) 日本周辺のイシイルカの分布と回遊. 海洋科学 20 (9): 528—535.
- 長沼光亮・市橋正子 (1985) 日本海における水温の平均像. 日水研. 日本海ブロック試験研究集録 (5): 1—100.
- W. N. ボナー (1986) アシカ科14種. 動物大百科 2 海生哺乳類 平凡社: 107.
- 増井光子 (1980) 哺乳類新生児体重表. 飼育ハンドブック 資料編. 日本動物園水族館協会: 81—108.
- 西村三郎 (1960) 1959～1960年の冬新潟県の海岸に漂着した珍動物6題. 採集と飼育 22 (7): 213—216.
- 北見健彦 (1977) クジラ (鯨). 新潟県大百科事典上巻. 新潟日報事業社: 407.

付表 新潟県下における海産哺乳類の記録

A : 新潟県水産統計
 B : 水産にいがた
 C : 新潟日報
 D : 柏崎日報
 E : 聞きとり
 F : 上越市立水族博物館

No.	年 月 日	場 所	漁 具	和 名	体 長 (m)	体 重 (kg)	文献・確認者※
1	1910. 3. 5	柏崎市宮川	漂 着	ナガスクジラ	24.6	68,000	箕 輪 ³
2	1923. 冬	新潟市窪田町	打 ち 上 げ	ヒゲクジラ類	> 10		E (佐藤)
3	1951. 12. 26	柏崎市番神	漂 着	ワモンアザラシ	1.0		D、箕 輪
4	1956. 2. 1	柏崎市番神	〃	アゴヒゲアザラシ	1.0	60	D、箕 輪
5	1956. 7. 29	西山町大崎	打 ち 上 げ	コビレゴンドウ 5頭	3.9~5.4	940~1,100	D、箕 輪
6	1957. 6. 14	柿崎市	漂 着	ワモンアザラシ	0.67		D、箕 輪
7	1957. 12	両津市	定 置 網	不 明		7,800	A
8	1958. 1. 30	能生町筒石	漂 着	ワモンアザラシ	0.6	11	西 村 ²⁵
9	1958. 2	両津市	定 置 網	不 明		900	A
10	1958. 11	新潟市	不 明	イシイルカ		100	A
11	1959. 1	両津市	定 置 網	不 明		2,300	A
12	1959. 3	新潟市	底 曳 網	イシイルカ		100	A
13	1959. 4	〃	マ ス 流 し 網	〃		1,100	A
14	1959. 5	村上市岩船	底 曳 網	〃		400	A
15	1959. 7	佐渡郡	定 置 網	不 明		2,000	A
16	1959. 月不明	新潟県内	底 曳 網	イシイルカ		100	A
17	1960. 1. 8	上越市黒井浜	漂 着	アザラシ科	1.0	15	西 村 ²⁵
18	1960. 1	両津市	定 置 網	不 明		700	A
19	1960. 3	村上市岩船	底 曳 網	イシイルカ		400	A
20	1960. 4	新潟市	マ ス 流 し 網	不 明		1,800	A
21	1960. 5	両津市	定 置 網	〃		400	A
22	1960. 6	〃	〃	〃		200	A
23	1961. 3	新潟市	マ ス 流 し 網	イシイルカ		500	A
24	1961. 4~ 5月	〃	〃	〃		300	A
25	1961. 4~ 5月	両津市	刺 し 網	不 明		200	A

No.	年 月 日	場 所	漁 具	和 名	体 長 (m)	体 重 (kg)	文献・確認者
26	1961. 4~ 5月	相川町	定 置 網	不 明		100	A
27	1961. 12	両津市	〃	〃		800	A
28	1962. 4	新潟市	マ ス 流 し 網	イシイルカ		100	A
29	1963. 3	村上市岩船	底 曳 網	〃		100	A
30	1963. 4	新潟市	マ ス 流 し 網	〃		200	A
31	1963. 4. 23	佐渡島弾崎北西97マイル	マ ス 流 し 網	オオギハクジラ	全長 5.2		西村・西脇 ^{1,2}
32	1963. 5. 10	大和堆N39°、E135°	〃	〃	〃 2.4		西村・西脇 ^{1,2}
33	1963. 5	村上市岩船	底 曳 網	イシイルカ		800	A
34	1964. 2	両津市両津	定 置 網	不 明		7,500	A
35	1964. 3~ 4月	新潟市	マ ス 流 し 網	イシイルカ		< 400	A
36	1964. 3~ 5月	村上市岩船	底 曳 網	〃		300	A
37	1964. 5~ 7月	真野町南	定 置 網	不 明		1,000	A
38	1965. 3~ 5月	村上市岩船	底 曳 網	イシイルカ		200	A
39	1965. 5月下旬	神林村塩谷	定 置 網	メソプロゾン属	約 4		E (渡辺)
40	1966. 3	新潟市	マ ス 流 し 網	イシイルカ		100	A
41	1966. 4	村上市岩船	底 曳 網	〃		400	A
42	1966. 5. 16	上越市下荒浜	打 ち 上 げ	ネズミイルカ	1.06	110.5	F
43	1966. 5	羽茂町羽茂	定 置 網	不 明		1,200	A
44	1966. 7. 10	村上市岩ヶ崎	打 ち 上 げ	ツチクジラ	9	7,000	B
45	1967. 1. 11, 12	両津市鷺崎	定 置 網	コビレゴンドウ 13頭 イルカ (種不明) 9頭		11,900	A、C
46	1967. 4	村上市岩船	底 曳 網	イシイルカ		100	A
47	1967. 6	佐渡島沖合	不 明	オットセイ	1.3		D、箕 輪
48	1967. 12. 29	赤泊村新保	漂 着	アザラシ科	1.8	40	B、伊 藤
49	1968. 2. 11	両津市和木	定 置 網	コイワシクジラ	4.0	3,500	A、C
50	1968. 4. 15	柏崎市鯨波	刺 し 網	カマイルカ	2.5		D、箕 輪

No.	年 月 日	場 所	漁 具	和 名	体 長 (m)	体 重 (kg)	文献・確認者
51	1968. 4	村上市岩船	底 曳 網	イシイルカ		100	A
52	1968. 6	羽茂町羽茂	定 置 網	不 明		1,200	A
53	1968. 6月上旬	佐渡島沖合	不 明	イシイルカ	2.3	150	C
54	1968. 7. 12	柏崎市大湊	打 ち 上 げ	ツチクジラ	11.0	10,000	D、箕 輪
55	1969. 12	両津市両津南	定 置 網	不 明		1,000	A
56	1970. 10. 18	新潟東港	漂 着	アゴヒゲアザラシ	全長 1.8	120	C、伊 藤
57	1971. 3. 7	柏崎市安政町	打 ち 上 げ	オットセイ	1.0	15	D、箕 輪
58	1971. 4. 9	能生町	魚市場に水揚	イルカ(種不明)	1.5		F
59	1972. 6. 4	巻町四郷屋	打 ち 上 げ	マイルカ	1.1	18	C
60	1973. 5. 24	相川町二見	定 置 網	コイワシクジラ	6.0	1,500	A、C
61	1973. 6	相川町高干	定 置 網	不 明		2,000	A
62	1974. 3	両津市内浦	〃	〃		1,000	A
63	1974. 7. 14	相川町達者	〃	コイワシクジラ	5.5	1,000	A、北見 ²⁶
64	1974. 7. 19	新潟東港	目 視	マイルカ	2.0		C
65	1975. 2. 15	新潟市窪田町	打 ち 上 げ	イシイルカ	2.0		C
66	1975. 3. 28	糸魚川市	魚市場に水揚	イルカ(種不明)			F
67	1975. 5	新潟市	刺 し 網	イシイルカ		1,000	A
68	1975. 12. 23	相川市長手岬	打 ち 上 げ	オキゴンドウ	3.5		北見 ²⁶
69	1976. 2. 4	中条町荒井浜	〃	ツチクジラ	10.0	5,000	C
70	1976. 2	両津市河崎	定 置 網	不 明		2,000	A
71	1976. 12	両津市内浦	定 置 網	不 明		1,000	A
72	1977. 1	両津市両津	〃	〃		1,000	A
73	1977. 3. 6	西山町石地	打 ち 上 げ	ネズミイルカ	1.4	60	D、箕 輪
74	1977. 3	相川町高瀬	目 視	トド			C
75	1977. 3. 27	能生町百川	漂 着	イシイルカ	1.7	80	B

No.	年 月 日	場 所	漁 具	和 名	体 長 (m)	体 重 (kg)	文 献・確 認 者
76	1977. 5	相川町二見	定 置 網	不 明		< 400	A
77	1977. 7	相川町稲鯨	刺 し 網	〃		1,000	A
78	1981. 6. 3	柏崎市宮川	打 ち 上 げ	オキゴンドウ	5.0	3,000	B、D、箕 輪
79	1982. 3	村上市岩船	底 曳 網	イシイルカ		< 400	A
80	1982. 6	相川町姫津	刺 し 網	セミクジラ	7.0		E (坂下)
81	1982. 6. 2	青海市須沢	打 ち 上 げ	マイルカ	全長 1.7		B
82	1982. 7	相川市金泉	定 置 網	不 明		1,000	A
83	1983. 2. 11	上越市五智	打 ち 上 げ	イシイルカ 雄	2.18	150	F、中 村
84	1983. 3	両津市河崎	刺 し 網	不 明		< 400	A
85	1983. 4. 5	羽茂町亀脇沖	〃	カマイルカ	1.85		E (野田)
86	1984. 1. 7	西山町	打 ち 上 げ	コビレゴンドウ	4.4		C
87	1984. 5. 10	中条町笹口浜	〃	メソプロドン属 雄	4.9	3,000	C、池 原
88	1985. 1. 4	両津市野浦	底 刺 し 網	コビレゴンドウ	4.0		C
89	1985. 2. 4	柏崎市松波	打 ち 上 げ	イシイルカ	2.0		D、箕 輪
90	1985. 2. 18	両津市北小浦	〃	メソプロドン属	6.0		C
91	1985. 2. 26、27	両津市藻浦 (70年ぶり)	目 視	トド2頭	1.0、2.5		C
92	1985. 2. 27	上越市虫生岩戸	打 ち 上 げ	バンドウイルカ 雌	2.85		F、中 村
93	1985. 9. 20	両津市東浜	定 置 網	コイワシクジラ	3.8	1,000	A、E (加賀)
94	1985. 12	両津市水津	刺 し 網	コビレゴンドウ		2,000	A、E (加賀)
95	1986. 1. 12、13	両津市加茂湖入口	目 視	ゴマフアザラシ	0.8		C
96	1986. 1. 26	両津市白瀬	定 置 網	コビレゴンドウ	3.7	< 400	A、C
97	1986. 2. 1	上越市五智	打 ち 上 げ	イシイルカ 雌	2.07	120	F、中 村
98	1986. 2. 25	出雲崎町出雲崎	〃	オットセイ			E
99	1986. 12. 22	中条町中村浜	〃	ツチクジラ	9.6		C、池 原
100	1987. 2. 15	聖籠町次第浜	〃	カマイルカ			E

No.	年 月 日	場 所	漁 具	和 名	体長 (m)	体 重 (kg)	文献・確認者
101	1987. 3. 8	柿崎町直海浜	打 ち 上 げ	イシイルカ	1.6		E (水沢)
102	1987. 4. 5	上越市長浜	漂 着	イシイルカ 雌	2.01	113	F、中 村
103	1987. 11. 16	両津市白瀬	定 置 網	コイワシクジラ	5.6		C
104	1988. 1~ 2月	〃	不 明	イシイルカ			E (野田)
105	1988. 1. 10、11	柏崎市中央海岸	目 視	オットセイ	1.3	35	B
106	1988. 3. 4	上越市居多ヶ浜	打 ち 上 げ	カマイルカ 雌	1.75	51	F、中 村
107	1988. 3. 29	村上市岩ヶ崎	〃	メソブロン属	5.2		C、池 原
108	1988. 4. 26	上越市有間川	漂 着	アカボウクジラ科 雌	2.13	86	F、中 村
109	1988. 5. 7	山北町桑川	目 視	ゴマフアザラシ	0.8	8	C
110	1988. 10. 10	両津市湊	漂 着	メソブロン属	4.0		C
111	1988. 12. 18	西山町石地	打 ち 上 げ	メソブロン属 雄	4.68	1,000	C、池原、中村
112	1989. 1. 4	新潟市五十嵐浜	〃	イシイルカ 雄	1.84	120	C、池原、伊藤
113	1989. 1. 17	巻町四ツ郷屋	〃	〃 雄	2.14	152	F、中 村
114	1989. 1. 26	柿崎町柿崎	〃	カマイルカ	1.59	48	F、中 村
115	1989. 2. 3	両津市白瀬	定 置 網	コイワシクジラ	6.9	4.5	C
116	1989. 2. 7	柏崎市中央海岸	打 ち 上 げ	カマイルカ 雌	1.65	40	D、箕輪、中村
117	1989. 2. 16	佐和田町諏訪町	〃	マイルカ	2.9		E (野田)
118	1989. 3. 11	西山町大崎	〃	ネズミイルカ	1.8		B、箕 輪
119	1989. 4. 2	赤泊村	海上に浮いていた	コイワシクジラ			E (野田)
120	1989. 4. 3	小木町城山	打 ち 上 げ	メソブロン属 雌	胎児あり		E (野田)
121	1989. 6. 11	相川町大浦	〃	メソブロン属 雄			E (野田)

※ 確認は実物、標本、写真などによる。

最近の捕鯨論議について (II)

日本鯨類研究所 長 崎 福 三

III 魚食と肉食

鯨類を食べるとは怪しからんという意見がある。反捕鯨の人々の行動原理は、ここに出発点を置いている。さまざまな理由づけはあるにしても、煎じつめれば「鯨を殺すこと」、「鯨肉を食べること」への反対につきる。食糧の乏しい時代ならともかく、経済的繁栄の中にある日本で、鯨肉を食べなければならない理由はあるまいという主張である。しかし、たかが鯨肉と言いつらも、一国の「食」の内容について他国の人びとが干渉するというのは、余り例のない話である。宗教的教義によって、特定の食物を忌避するという例は少ない。しかし、このような教義を信奉する人びとも、異宗教の人びとに、自分達の戒律を押しつけることはない。たとえアメリカ人の鯨肉食を法律で禁止したとしても、一向に差し支えないことであり、日本人が文句を言う筋合はない。それと同様に日本人が鯨を食べようと、うにやなまこを食べようと、アメリカ人に文句を言われることはあるまい。

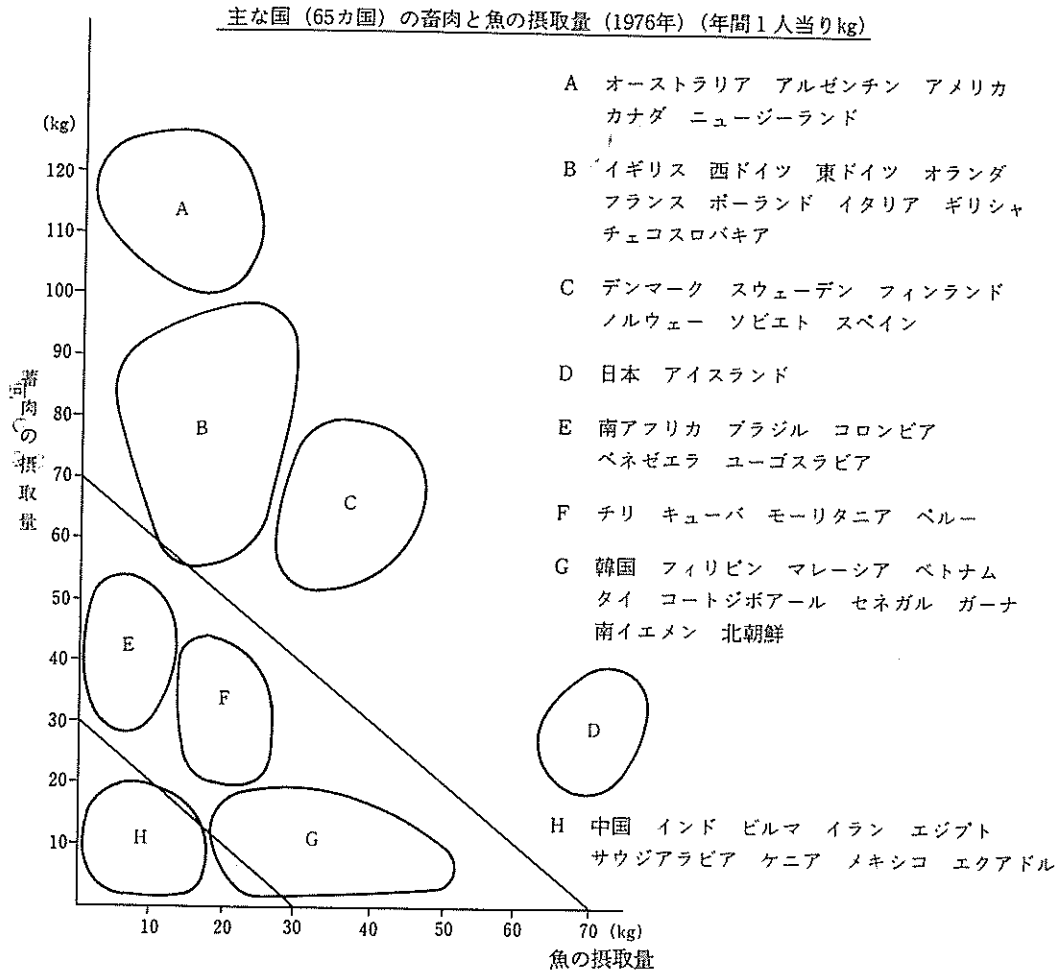
日本人は本来農耕型、米食民であり、東南アジアの多くの国々の人と同様、米を主食にしている。これに対し欧米人は牧畜型、肉食民ということが出来る。特にアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドでは肉の供給が潤沢であり、消費量が多い。ここでは主食は肉とみてよい。日本の場合、動物性食品は主として海や淡水の魚貝、つまり水産物に依存してきた。そういう意味で海洋依存型の民族であるということもできる。これを簡略化して言えば日本人の食は米一魚を主軸とし、アメリカ人のそれは肉ということになる。

牧畜民は飼育している動物を食用としているので、対象は自から限られる。食の多様性は望むべくもないし、その必要もない。彼等はずねに食料である畜類と一緒に生活している。今でも牧畜型である欧米人の食べものは、農耕型、海洋型である日本人のそれと比較すると、その原料はすこぶる限られている。肉といえは牛、豚、羊、山羊、それににわとり程度のもので、内臓、加工品、卵などを加えてもその数はしれたものである。肉屋と魚屋の店頭を覗いてみればその差は一

目瞭然である。アメリカを旅した人は身をもって体験されたことと思うが、アメリカ中どこに行っても日常食べているものは殆んど同じであり、地方的変化も季節的変化も余りない。日本人のもつ食物に対する季節感、旬の感覚は殆んどない。日本人にとってアメリカでの食生活は、なんとも単調で飽きがくる。暫くの間はともかく、一ヶ月、二ヶ月となると下宿生活者などいい加減食べるものでうんざりしてくる。

日本人はカロリーは米から、動物たん白質は魚からとってきた。(もっとも、もっと正確に言えば、明治時代までは一般の人々は余り米と魚には縁があったとは思えない。「日本人は米と魚を存分に食べたいという悲願をもちつづけてきた民族であった」などと言われるゆえんである。)日本人の海洋生物利用は、その量ばかりではなく、その多様性からみて他国にその例をみない。大はくじら、いるかから多種にのぼる魚や貝は言うに及ばず、いか、たこ、うに、なまこ、ほやそして多くの海藻まで、殆んどすべての生物を巧に利用してきた。海洋の生物体系を利用するには食性段階の高いものから低いものまで、万遍なく、幅広く収穫利用するのが、最も合理的な方法である。もし、利用種を特定なものに限定してしまうと、漁期も漁場も限られ、漁獲量もごく少くなる。日本人が昔からくじらやいるかを食べてきたのは、このような海洋生物利用の一環であり、ごく自然な海の幸の利用法なのである。そうしなければ海に依存して生きることはできなかった筈である。だから日本人はくじらを魚の一種として取り扱ってきた。鯨肉が日本人に好まれてきた理由の一つは、味の良さは畜肉に似ており、感覚的には魚として受け入れてきたことによる。

さて、ここで肉食と魚肉を対比してみることにしよう。主要な国々の畜肉、魚貝の年間平均一人当りの摂取量を図にプロットして、これをグループに分けてみる。まず畜肉、魚の摂取量がそれぞれ50キログラムの点を直線で結ぶと、内側にできた三角形の中に入る国々(つまり肉と魚を合計して50キロに達しない)と、その外側にある国々へと区別できる。外側の国々には経済先進国がすべて含まれている。これら経済先進国の中でも畜肉の消費量には大きな開きがある。オース



- A オーストラリア アルゼンチン アメリカ
カナダ ニューージーランド
- B イギリス 西ドイツ 東ドイツ オランダ
フランス ポーランド イタリア ギリシャ
チェコスロバキア
- C デンマーク スウェーデン フィンランド
ノルウェー ソビエト スペイン
- D 日本 アイスランド
- E 南アフリカ ブラジル コロンビア
ベネゼエラ ユーゴスラビア
- F チリ キューバ モーリタニア ベルー
- G 韓国 フィリピン マレーシア ベトナム
タイ コートジボアール セネガル ガーナ
南イエメン 北朝鮮
- H 中国 インド ビルマ イラン エジプト
サウジアラビア ケニア メキシコ エクアドル

資料：FAO Fisheries Circular No.314 THE ECONOMIC AND SOCIAL EFFECTS OF THE FISHING INDUSTRY より

トラリア、アメリカ、ニューージーランド、カナダに南米のアルゼンチンを加えた5ヶ国は肉の摂取量が100キロをこして、突出している。まさに肉、特に牛肉を主食としている肉食国であり、当然のことながら魚の摂取は少い。フランス、イギリス、オランダ、西ドイツ、東ドイツ、イタリアなどを含むヨーロッパ諸国は100~60キロの肉をとっており、肉食国といえることができる。デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドの北欧諸国にソビエト、スペインを加えた国々では肉以外に魚への依存がかなり高くなる。これに対し日本とアイスランドは肉より魚への依存度ははるかに大きくなる典型的な魚食国である。

50-50キロ線の内側に入る多くの国々のうち、韓国、北朝鮮、フィリピン、マレーシア、ベトナム、タイなどの東南アジア諸国は魚の摂取量が肉にくらべて

相対的に多く、魚食傾向の強い国々である。そして、これらの国々では米を主食としている。このほかガーナ、シエラレオーネ、コートジボアールなども魚食が強いが、いずれもアフリカの西岸に位置している。中近東、アフリカ、中南米の諸国はいずれも肉食が強いが、まだその摂取量は少ない。中国も豚肉食国である。

ここで、この図と捕鯨との関係を考えてみよう。現在商業捕鯨は、IWCによって禁止されているので、捕鯨国という言い方は妥当ではないが、ごく最近まで捕鯨を行ってきた国は日本、アイスランド、韓国、ソビエト、スペイン、ノルウェー、デンマークなどである。これらの国々は漁業国であり、海洋生物への依存度が比較的高い。この中で、鯨肉を日常的に食べてきたのは日本、ノルウェー、グリーンランド、アイスラ

ンドで、他の国ではくじらを捕獲はするが、直接食用にはせず、大部分は日本へ輸出してきた。捕鯨国は必ずしも鯨肉食国ではない。しかし日本のように伝統的に鯨肉を食べてきた国では、単なる経済問題の枠をこえた、食文化に関係した問題が含まれてくる。この問題は北極くじらのエスキモーやミンククジラなどに依存しているグリーンランド人の、くじらと食生活との関係と共通している。

次に畜肉の摂取量の多い国々をみると、いずれも反捕鯨運動の盛んな拠点であることに気がつく（これらの国々は、かつては主要な捕鯨国でもあった）。アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどがそうであり、いずれもアングロ・サクソン系の人々を中心の国々である。ヨーロッパではイギリス、フランス、オランダ、西独など、いずれも反捕鯨の勢力が強く、食性は肉食である。したがって、ここで捕鯨一反捕鯨という構図を、魚食—肉食という形に置きかえることもできる。

食料として畜肉と魚貝、または肉食と魚食と表現してもよいが、この両者の間には基本的な相違がある。牧畜型は低次の生産物を飼料として家畜に食べさせるのであるから、消費する基礎カロリーは高くなる。1キロの畜産物を生産するには平均6～8キロの飼料を必要とする。肉牛1キロを生産するには10キロ以上、豚肉では4—5キロ、鶏肉では2キロ程度の餌を与えなければならない。これをカロリーに換算すると、牛乳では19.4%、鶏肉で9.6%、豚肉で18.5%、牛肉で6.8%、羊肉で7.6%に減少することになる。したがって畜肉を主食としている西欧人の、食用として消費する基礎カロリーは、穀類を主食としている東洋人などと比較してはるかに高くなる。平均して開発途上国の人々は年間200キロの穀類を消費しているが、先進地域では500キロを上廻り、アメリカでは5倍の1トン消費している計算になる。アメリカ人1人の消費はインド人5人、日本人に換算して2人強に相当する。

今、世界中の人々が平均1日500グラムの穀物が必要だとすれば、総人口47億の人々を支えるには年間約8億トンの穀類の生産でこと足りる。これに対し、最近の穀類生産は16億とも17億ともわけており、穀類だけでも充分に人口を養う量に達している。しかし、世界中の人々が肉食に指向し、現在の欧米人なみの食性になじみ始めたら、とても地球のもつ農業生産力では賄うことはできない。畜肉に対し、魚貝をみると、ごく一部の養殖魚を除き、大部分は自然の生産物の収穫である。問題は海の中の生物体系をどのように

巧みに利用するかということである。プランクトン食の魚貝を利用すれば漁獲可能量は大きくなるが、高級な魚食性魚だけを利用すれば漁獲量は限られる。このような生物体系を利用するには、食性段階の高いものから低いものまで、幅広く収穫する方法が最も好ましい。この点では日本の漁業生産は効率的である。

ここで誤解のないよう念を押しておかなければならないが、農耕に不向きなヨーロッパに住む人々の食肉習慣に異を唱えるつもりはさらさらない。日本でも戦後は畜肉の消費量が急激に伸びている。しかし既に述べた、限られた食糧生産の中で、増加する人口、⁴¹向上する個人消費に対応するためには、夫々の民族のもつ、地域条件に密着した食性を生かした工夫が必要になろう。各民族のもつ伝統的な食習慣を大事にしなければならない。

「昔はともかく、経済大国である日本で、僅かばかりの鯨肉の供給が無くなったとしても、どれほどのこととはあるまい。飽食と言われるほど食料には恵まれているというのに」という質問があるだろう。日本人と鯨肉との関係は「あるから食べる、無いから食べない」といったようなものではなかった。戦前でも意外なほど日本人は鯨肉を食べていた。昭和5～15年の頃には、肉類（畜肉、とりなどのほか鯨肉を含む）の日本人1人1年当りの供給量は2～2.5キロ程度で、このうち15%前後は鯨肉によって占められていた。戦後の食料不足の時代、鯨肉は日本人の食べものの中で重要な役割を果たした。戦前はどちらかと言えば特定の地域での消費が多かったが、この時代には鯨肉消費が全国的に普及し、特に都市生活者の食生活の中にも入り込んだ。昭和35年頃までは肉消費中30%をこす部分が鯨肉であった。そしてこれらの鯨肉のかなりの部分は学校給食を通して幼少の世代の人々によって消費されていた。

戦後の異常な食糧難時代とはいえ、食肉消費の30%を上廻る重要な動物性食品であった鯨肉は、日本人にとって単なる一過性の食品とは思えない。ある意味ではアラスカのエスキモーやグリーンランド人以上に鯨肉への依存度は大きかったとすることができる。現在でも鯨肉に対する潜在的需要が大きいのは当然のことである。昭和40年以降、生産量の減少にともなって消費量も漸次低下してきており、鯨肉の比率はごく低い水準に落ちてはいるが、鯨肉が日本人の食品リストから姿を消すことについては、一般にかなり強い抵抗があるにちがいない。

IV 鯨の国際管理

「捕鯨は濫獲の歴史であった」とよく言われる。まさにその通りで、10世紀に行われたバスク人によるビスケイ湾を舞台にしたせみくじらの捕鯨以来、新しい漁場の開発、捕獲による鯨の減少という過程の繰返しの歴史であった。しかし、濫獲の歴史は、なにも捕鯨に限ったことではなく、程度の差こそあれ、多くの漁業の歴史も濫獲問題が主要課題であった。商業価値の高い、捕獲し易い生物とはかく過剰利用の状態になり易い。かつて19世紀末から20世紀初頭にかけて北太平洋のらっこ、おっとせい群は文字通り濫獲の対象になり、一時は絶滅に近い状態にまで追い込まれたことがあった。幸いこれらの動物群は、その後の国際的協定による規制が有効に作用して、除々に回復し、健康な状態にまで復元した。

魚類の場合も漁獲により資源がいちじるしく減少してしまった例は、洋の東西を問わずかなり多い。日本周辺の海域でも過剰利用の例をあげるのに手間はかからない。一般に捕鯨を含めた漁業の特性の一つは、所有主のいない、原則的には「自由に利用しうる」資源を対象にしていることである。「皆が得をして誰も損をしない」という「公海漁業自由の原則」は、無尽蔵な資源を前提としている。しかし現実に資源が限られている以上、この原則はどこかで破たんする。少なくとも現在の人々は、海が無尽蔵の宝庫であるなどとは考えていない。どこかに限界があり、魚は獲れば減ることもよく理解している。しかし、海洋資源の法的地位は、あたかも無尽蔵であるかのような状態に置かれてきた。「万民の共有物」とか「無主物」とかいった考え方である。そして、いわゆる「共有物の悲劇」をくり返すことになる。

鯨は従来全くの野放しの状態で利用されてきたわけではない。既に1930年代後半から国際捕鯨協定が作られ、戦後はいち早く捕鯨条約に基づく委員会が組織された。そして委員会の場では毎年のように鯨の保存措置が論じられてきたが、結果としては鯨の保存と長期的利用の確立には失敗したことになる。失敗の主要な原因は二つ考えられる。一つは捕鯨条約に加盟したメンバーは、当時の主要捕鯨国であった（オーストラリア、フランス、南アフリカ、アイスランド、メキシコ、デンマーク、日本、イギリス、ソ連、アメリカ、アルゼンチン、ノルウェー、ブラジル、ニュージーランド、オランダ）、そのため、しばしば捕鯨委員会は「捕鯨国クラブ」などといわれた。そして捕獲頭数の制限の動機は、資源保存というよりは、鯨油生産量の

調整に主眼があった。もし資源保存を優先しようとするれば、BWU制（しろながす換算制度）による頭数制限などを採用する筈はなかった。

失敗のもう一つの原因は、戦後南氷洋の捕鯨が隆盛をきわめた1950年代になっても、鯨についての生物学的知識が著るしく立遅れていたことである。鯨資源についての評価ができていないにもかかわらず、捕鯨は急速にその捕獲頭数を増加させた。これでは濫獲を生むのは当然のことであった。一般の漁業の場合でもこのような例は多く、資源量の推定ができる頃には漁獲量は既に適正の水準をはるかにこして、過剰利用の状態を呈しているということは稀ではない。このうえ、鯨は魚に比較してはるかに滅り易く、しかも増えにくい動物である。

動物群の管理・利用法は、その資源の生物学的特性に応じて変わってくる。従って、有効な管理を実施するためには、資源のもつ主要なパラメーターを知る必要がある。一般的に鯨類の場合、次のような共通した特性をもっている。1) 自然死亡が極めて小さく、したがって寿命が長い。例えばしろながすでは最長寿命が120年、まっこうで70年と、ともに人間の平均寿命を上廻るほどである。そのために捕獲の影響を受け易い。2) 加入数が資源量に依存しているので、数量的に安定しており、魚類のような変動はない。3) 再生産率がきわめて小さいので、過剰な捕獲を行うと、その結果が長く残る。回復力が小さいということになる。

このような鯨資源を管理・利用するには、捕獲数の制限が必要であることは言う迄もない。捕獲可能数を算出するためには資源量と、年間の増加数を推定しなければならない。しかし資源量を推定するには、かなり広範囲な、そしてきめの細い目視調査が必要であり、増加率を推定するためには各種のパラメーターの解析が必要である。鯨のような資源量が安定している場合に適用できる管理・利用法が目下、日本の科学者だけでなく、他のIWCの科学者によって開発されつつある。この管理方法によると資源のパラメーターについて情報がなくとも管理・利用を行うことができ、長期的には目標とする資源の水準を保つことが可能になる。この方法は田中昌一前東京水産大学教授が提示されたもので、目下研究が進行中である。

この管理方法は経験的方法とでも言うべきもので、2つのパラメーターを使用する。1つは資源量の水準で、現在の水準が目標とする資源水準に対し、どの位置にあるかという情報である。したがって資源の絶対数量でなくとも、相対的位置が定めればよい。2つめ

の情報は資源が増加しているか、減少しているかという資源の動向を知ることができる。この2つの情報を組み合わせることによって、経験的適応方法による管理・利用措置を決定してゆく。過程の中で不可欠な情報は、資源の増加・減少の傾向であり、継続的モニターが必要である。この方法を適用すれば鯨類の管理・利用は、その種を絶滅に追いこむような危険はなく、永続的に継続させることができる。

しかし、経験的適応法を採用するにしても、予め資源のもつパラメータを知っていれば、短時間の試行で安定捕鯨の水準に到達することができる。現在日本が実施している南氷洋におけるミンクジラの調査は、このようなパラメータ、特に年令別自然死亡率の推定を目的としている。この調査にはもう一つ重要な目標がある。それは南氷洋周辺海域でのミンクジラの性別・年令別の棲み分け状況を明かにすることである。この情報は、将来、本格的にこの鯨種を利用・管理する際に必要な情報となる。この情報を基にして漁場の選定、漁場ごとの捕獲数の配分といった細かい利用法がきまってくる。反捕鯨グループは、このような調査活動にも反対しているが、現条約の枠の中で、このような調査活動に反対することは、条約の主旨に対する挑戦でもあろう。

われわれは従来の捕鯨活動には、いろいろと問題点、欠陥があったことを知っている。「商業捕鯨の復活」をいう場合、過去の濫獲の歴史を繰返さないために、このような欠点を修正した商業捕鯨を作りあげなければならない。これからの捕鯨を考える場合、2つの点について新しい配慮が必要になる。1つは操業方法であり、他の1つは利益配分である。

鯨の捕獲は、従来の商業捕鯨のように経済効率の高い、密度の高い海域で、大型の鯨を選別的にとる方法はやめ、与えられた割当数を、時期的にも、海域的にも広く万遍なく採捕する方法を取り入れなければならない。そのためには、現在日本が南氷洋で、ミンクジラについて行っている標本採集方法が参考になる。もし、そうなると、商業捕獲物そのものが科学的調査標本として、情報を提供してくれる。勿論、漁場、漁期、体長制限などの調整も考慮の中に入れなければならない。管理・利用システムの中に継続的モニターが組み込まれていなければならないので、なるべくバイアスのない採捕が必要になる。

日本の南氷洋における捕鯨に対して、「本来共有物である南氷洋の鯨を、日本だけが利用するのは怪しからん」という意見がある。「公海の共有物」や「公海での漁業」はすべてこの理屈の中に含まれてしまう、

勝手な理屈であるが、将来日本が南氷洋の鯨資源を利用する場合には、その利益の一部を国際社会に寄与することを考える必要はあるだろう。世界の鯨類研究に貢献するための基金を設けることも有効かもしれない。このような利益の配分についての配慮も必要になる。

1972年のストックホルムでの第1回人間環境会議で、反捕鯨側がかかげたスローガンは「鯨類を絶滅から救う」ことであった。そして10年間の商業捕鯨のモラトリアムを決議し、これをIWCに勧告した。それから10年後の1982年にIWCは商業捕鯨のモラトリアムを決定し、1987年に実質的に商業捕鯨は姿を消した。反捕鯨団体は目的を果たしたことになる。

しかし商業捕鯨がなくなった後になっても、反捕鯨活動は続いている。日本が行っている南氷洋での鯨類調査活動に対し、執ように反対の宣伝を行っている。商業捕鯨反対と調査のための捕鯨活動反対とは、その意味が異なる筈である。かつて、彼等は何を目的としてきたのか、そして現在彼等は何を望んでいるのか。これまでの経緯を辿ってみると、どうやら彼等は「鯨の絶滅」などは一つの名目で、本音は「日本人が鯨を殺すこと」、「日本人が鯨肉を食べること」に反対しているらしい。「日本人」という条件がつからしい。もし、そうであるとすれば、鯨を他のもの、他の動物に置き換えた反対運動が次々とでてくる可能性がある。

1972年のストックホルム会議の当時、IWCは鯨類すべてが絶滅の危機にひんしているなどとは考えていなかったし、商業捕鯨のモラトリアムを行う必要など認めていなかった。特にその科学小委員会は、かなり冷静にモラトリアム提案を見ていた。しかし、当時といえど、鯨の保存のため、捕鯨操業を規制するための有効な措置が必要であることは事実であった。この頃から捕鯨に対する規制は一段ときびしくなり、管理体制が強化されてきた。これはIWCにとっても、鯨類の保存にとっても結構なことであった。

もし、鯨類が絶滅の危機にあり、これを救うための運動が必要だとすれば、これほど一般の「違の共感をよぶことはあるまい。草の根運動として、運動資金を集めることも容易であろう。鯨類にはどのような種があり、どのような分布・生態をもっているか、資源的にはどうなっているか、管理・利用体制がどうなっているか、などは「知らしめず」、ひたすら絶滅論を展開し、反捕鯨の動きを燃え上げればよかった。これは明らかに成功した。彼等は活動に充分以上の資金を調

達することができ、多くの国々に政府・議会筋にも接近することができた。そして「鯨、一絶滅」という印象を一般の人びとに与えることにも成功した。

しかし、その後の IWC の活動の中で、保護されるべき種は保護され、論議の対象は資源量の大きい南水洋のミンククジラなどに集中した。IDCR の調査は南半球のミンククジラ資源が大きく、健全であることが一般に認められる結果になりはじめた。この鯨に関する限り、絶滅論議は通用しない。そこで、次に持ちだされたのが、資源に関するわれわれの知識の「不確実性」であった。われわれが持っているミンククジラについての知識は不十分であり、信頼が置けないという。したがって、信頼できる情報がえられるまでは商業捕獲を禁止すべきだという論理をもちだしはじめた。反捕鯨を主張する科学者による、この作戦も成功し、1982年のモラトリアムの決定にこぎつけた。

1982年に決定したモラトリアムには附ずい条項があり、遅くとも1990年に、このモラトリアム措置の効果について評価をすることになっている。そのためには「不確実」といわれた。われわれの鯨に関する知識を「確実」にしなければならない。日本が1987年から実施を計画した調査は、確実な情報・データを収集することが目的である。しかも、現条的には締約国による調査を認める条文がある。

しかし反捕鯨グループは日本の調査は有効な情報・結果を生まないとし、商業捕鯨の延長であると非難している。そして調査は目視などの非致死調査が可能であると主張している。なんとも理屈に合わない言い分であるが、彼等の一連の主張の経緯からみて、彼等の目的は「日本人が鯨を獲る」ことに反対していることが明らかである。「絶滅」、「科学性の欠除」、「知識の不確実性」などで、その都度スローガンは用意されて

きたが、問題は別なところにあったことになる。ここまでくると、現条約の前文に明記されている条約の目標などは全く色あせてしまう。

さて、このような反捕鯨の運動は、いくつかの環境団体によって強力に押し進められてきた。その結果、IWCの活動は「政府機関でない団体」(NGO)によって支配されるようになってしまった。そして1982年には、加盟国3/4の多数の票決でモラトリアムを採決した。この決定をするために環境保護団体はいくつかの国々に、委員会への加入をすすめ、反捕鯨の票の確保をはかった。このような国々には、捕鯨は勿論、鯨の調査・管理などについて、積極的な関心をもたず、票決のために動員された要員の役目を果すだけであった。それは、あたかも国際機関という乗りものを、ある目的意識をもつ団体がハイジャックしている図に似ている。このようなIWCのなりゆきを見ると、同じようなことが他の国際機関で起こらないとは限らないような気がする。

ハイジャックされた乗り物は、本来の目的地には向わない。ハイジャックした者の指定した方向に向うことになる。最近のIWCは、条約が定めた目的とは一致しない方向に動いている。条約は鯨類の資源保存、合理的利用、及び捕鯨業の秩序ある発展を目標としている。

一方、日本の主張、行動の原理は、言うまでもなく条約に基礎を置いている。日本の捕鯨問題における対応の、いわば憲法は条約そのものである。全く相反する行動原理をもつ別々のグループが、IWCという枠の中で共棲することはできない。もし、反捕鯨グループが本当に捕鯨行為を、この世界から抹殺しようとするならば、現行条約を廃止することから出発しなければならない。

台湾のコマッコウ

長崎大学水産学部 白木原 国 雄

九州大学農学部の木村清朗氏よりいただいた情報である。1989年11月11日に台湾東南部の台東市北方の成功港の魚市場において、氏は1頭のコギアを発見された。おそらく突ン棒により捕獲されたと思われ、体長は目測で約2.5m、性別不明とのことである。

Kogia 属にはオガワコマッコウ (*K. simus*) とコマッコウ (*K. breviceps*) の2種がある。外見からの両種識

別は喉に溝があるかどうかで行える (大村、1986)。これがあれば前者である。写真を見ると、溝があるようにもみえるが、はっきりしない。なお長崎大学名誉教授の水江一弘氏によると、台湾の東岸の魚市場に突ン棒で獲られた *Kogia* がしばしば揚げられるとのことである。



台湾成功港魚市場に揚げられたコマッコウ (*Kogia*)

ストランディング・レコード—14

番号	日付	種類	頭数	場所	報告者	備考
O-92*1	06/08/89	アカボウクジラ	1	静岡県清水市 折戸海岸	大隅清治 余川浩太郎 木白俊哉 (遠洋水産研究所)	体長5.16m、雄
O-93	13/06/89	イシイルカ	1	北海道上磯町七重浜	桜井泰憲 (北海道大学)	体長2.20m、雌
O-94	03/09/89	<i>Mesoplodon</i> sp.	1	静岡県焼津市石津浜 (定置網)	藤巻康年 (伊豆三津 シーパラダイス)	体長4.8m、 体重1,070kg、雌
M-21	02/06/89	ミンククジラ	1	三重県鳥羽市相差町 (定置網)	若林郁夫 (鳥羽水族館)	
M-22	23/09/89	ミンククジラ	1	三重県志摩郡志摩町 御座 (定置網)	若林郁夫 (鳥羽水族館)	体長3.91m、雌
O-95	24/07/89	ハナゴンドウ	1	福岡市西区名柄川 河口	大内康敬 (福岡水産試験場)	体長2.7m、雄
O-96	19/10/89	バンドウイルカ	1	三重県志摩郡志摩町 御座 (定置網)	若林郁夫 (鳥羽水族館)	体長2.55m、雌
M-23	07/04/88	ミンククジラ	1	三重県南牟婁郡御浜町 阿田和 (定置網)	若林郁夫 (鳥羽水族館)	
O-97	08/10/88	コマッコウ	1	三重県度会郡南勢町 内瀬	若林郁夫 (鳥羽水族館)	
M-24	12/10/89	ミンククジラ	1	福岡県遠賀郡岡垣町 波津海岸	太田正道 藪本美孝 岡崎美彦 (北九州市立 自然史博物館)	
P-5	21/11/89	キタゾウアザラシ	1	東京都新島前浜海岸	浜岸豊治 (魚津水族館)	新聞情報(北日本新 聞-22/11/89)

O-98	28/11/89	<i>Mesoplodon</i> sp.	1	秋田県八竜町釜谷浜	杉原 茂	新聞情報 (北羽新報 -29/11/89)
O-99	16/08/89	<i>Mesoplodon</i> sp.	1	富山県魚津市 魚津港沖	浜岸豊治 (魚津水族館)	体長4.5m、
O-100	12/12/89	マイルカ	1	富山県魚津市魚津 魚津補助港蟹江浜	浜岸豊治 (魚津水族館)	体長2.5m、雄
M-25*2	29/10/89	ミンククジラ	1	北海道斜里郡斜里町 オシンコシン	中川 元 (知床博物館)	

*1 この個体を扱った読売新聞の記事を東海大学・森恭一さんからもお送りいただきました。

*2 この個体を扱った北海道新聞の記事を北海道教育大学・木村方一さんからもお送りいただきました。